姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第34集

市之郷遺跡

―第12次発掘調査報告書―

2016

姫路市教育委員会

序

姫路市内では、現在 1,200 箇所の遺跡が知られています。近年では、開発工事に伴う発掘調査が急増しており、平成 26 年度では大小合わせて年間約 600 件を数えました。

本書で報告する市之郷遺跡は、JR 姫路駅から 1.5km 東方に位置する遺跡で、今回の発掘調査は JR 山陽本線「東姫路駅」駅舎建設に伴うものです。この事業は、キャスティ 21 地区や阿保地区区画整理区域など、市街地周辺の土地利用を促進し、地域住民の利便性や公共施設へのアクセス向上を目的として、平成 22 年度以降、平成 28 年春開業を目指して、本市と西日本旅客鉄道株式会社が協定を締結し進めてきました。

ここに発掘調査の成果を報告し、本書が地中に眠る市之郷遺跡の姿を知る一助として活用されることを願っております。

最後に、発掘調査・整理作業の実施にあたり多大なご協力を賜りました西日本旅客鉄道株式会社、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会

教育長　中杉隆夫

例言・凡例

1. 本書は、姫路市市之郷字長堤他で実施した市之郷遺跡の第 12 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西日本旅客鉄道株式会社による山陽本線御着・姫路間新駅「東姫路駅」の建設に先立って実施した。
3. 発掘調査は西日本旅客鉄道株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センター　黒田祐介が担当した。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用した。方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999 年度版)に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、遺構種ごとにつけた。遺構種略号は次のように呼称する。
   ピット：SP　　溝：SD
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご援助を頂いた。
   西日本旅客鉄道株式会社　　大鉄工業株式会社　　有限会社松浦興業

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会		
	教 育 長	中杉隆夫
	教育次長	林　尚秀（～平成27年6月30日）
		八木　優（平成27年7月1日～）
生涯学習部		
	部　　長	植原正則（平成27年7月1日～）
文化財課		
	課　　長	福永明彦（～平成27年6月30日）
		花幡和宏（平成27年7月1日～）
	係　　長	大谷輝彦
埋蔵文化財センター		
	館　　長	秋枝　芳
	係　　長	岡﨑政俊
		森　恒裕
	技術主任	小柴治子
		中川　猛
		福井　優
		南　憲和
	技　　師	黒田祐介
		関　　梓
	主　　事	小林啓佑
	嘱託職員	香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代
	整理補助員	黒岩紀子、清水聖子、寺本祐子、藤村由紀

目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯 …… 1

第2節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

第3節　既往の調査 …… 1

第Ⅱ章　調査の成果

第1節　調査区の基本層序 …… 2

第2節　本発掘調査の成果 …… 2

第Ⅲ章　総括 …… 3

図版目次

図　版　1　／　図1　周辺の遺跡　　図2　調査地の位置

図　版　2　／　図3　調査区平面図

図　版　3　／　図4　土層断面図　　図5　出土遺物実測図

図　版　4　／　図6　兵庫県第1次調査E区と姫路市第12次調査区

写真図版目次

写真図版1　／　6区西半全景

写真図版2　／　11区全景　　2区南壁土層断面　　3区西壁土層断面

写真図版3　／　3区北壁土層断面　　4区西壁土層断面　　5区西壁土層断面

6区南壁土層断面　　6区南壁際遺物出土状況　　6区南西隅遺物出土状況

写真図版4　／　3区全景　　4区全景　　5区全景　　6区西半全景

写真図版5　／　7区全景　　7区西壁土層断面　　8区全景　　8区西壁土層断面

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第 1 節　調査に至る経緯

姫路市市之郷字長堤他において、西日本旅客鉄道株式会社による山陽本線御着・姫路間新駅の建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である市之郷遺跡（県遺跡番号：020462）に該当している。建設予定地に隣接する現線路部分は、線路の高架化に伴って平成 5 年度(1993 年度)から平成 8 年度(1996 年度)にかけて兵庫県教育委員会により発掘調査が実施されている。この成果から、工事が遺構面に達することが明らかであった。このため、平成 27 年(2015 年)4 月 1 日に「山陽本線御着・姫路間新駅設置に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査の対象面積は 176.2 ㎡で、平成 27 年 4 月 7 日から 6 月 9 日の間の実働 11 日で実施した。遺跡調査番号は「20150014」で、姫路市が実施した市之郷遺跡の調査としては第 12 次調査である。

第 2 節　遺跡の立地と歴史的環境

市之郷遺跡は、JR 姫路駅から東へ約 1.5km の姫路市市之郷に所在し、現市川の西岸に立地している(図 1)。包蔵地の範囲として、東西約 1km、南北約 350m が把握されている。その大部分が姫路駅周辺の山陽本線等連続立体交差事業等によって発生した広大な用地を活用した都市計画「キャスティ 21 計画」のサブエリア(生活利便ゾーン、健康福祉・住宅ゾーン)に該当しており、兵庫県警姫路警察署やものづくり大学校、すこやかセンターなどの機関・施設が置かれ、再開発がおこなわれている。また姫路駅周辺土地区画整理事業対象地にも該当しており、基幹道路大日線などの道路整備が進められてきた。

当地の包蔵地名は「仮称　姫路駅周辺第 3 地点遺跡」であったが、平成 22 年(2010 年)5 月 26 日をもって「市之郷遺跡」に変更された。なお包蔵地名にもなっている「市之郷」は、『枕草子』『山家集』等に登場する「飾磨市」に由来する地名として知られている。

市之郷遺跡は弥生時代以来営まれた集落遺跡で、遺跡内には市之郷廃寺（県遺跡番号：020463）がある。周辺には阿保遺跡第 1 地点・第 2 地点が所在し、前者からは初期須恵器や韓式系土器がみつかっており、近年には縄文土器も出土した。後者では弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡、木棺墓が確認され、蹄脚硯や石帯等も出土した。約 1km 西方には播磨国府推定地の本町遺跡やその関連施設跡とされる豆腐町遺跡がある。また 3km 圏内には辻井廃寺や播磨国分寺跡等の寺院跡が散在している。市川東岸に目を向けると、市内最大の前方後円墳である壇場山古墳や渡来系石室を持ち豊富な副葬品の出土で知られる宮山古墳をはじめ、古墳時代を通じて多くの古墳が築造されている。

第 3 節　既往の調査

昭和 16 年(1941 年)におこなわれた姫路貨物駅操車場拡張工事によって多くの弥生土器が出土した。その際、遺物の採集がなされており、今里幾次氏によって報告されている(今里 1962)。

昭和 45 年(1970 年)には、山陽新幹線建設に伴う事前調査が鎌木義昌氏担当で実施され、弥生時代中期の竪穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された(鎌木 1971)。

その後、姫路駅周辺土地区画整理事業や山陽本線等連続立体交差事業等に伴って、発掘調査が実施されてきた。調査は前者が姫路市教育委員会、後者は兵庫県教育委員会によって実施されている。

姫路市教育委員会による調査は、平成 6 年(1994 年)以降今回報告する調査を含めて 12 次の本発掘調査を実施している。

兵庫県教育委員会による調査は、平成 7 年度(1995 年)以降 5 次にわたる本発掘調査がおこなわれて

いる。今回報告する姫路市第 12 次調査と特に関連するのが兵庫県第 1 次調査である（図 6）。その調査は山陽本線の高架化に伴う調査で、そのうちの E 区が今回の調査地に隣接している。以下では報告の要点を示す（兵庫県教育委員会 2005）。E 区では砂礫層上に洪水砂層が堆積し、これが基盤をなしている。この土層からは縄文時代晩期の長原式鉢が出土した。遺構検出面の標高は E 区東端が 11.9m、西端が 11.3m と西に向かって傾斜している。確認された遺構は弥生時代から平安時代以降にかけてのものである。その内容は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、柱穴、溝状遺構、土坑で、その大部分は E 区東半に分布し、今回の調査区に特に近接する西半はわずかな柱穴や溝状遺構が分布しているのみであることが報告されている。

第Ⅱ章　調査の成果

第 1 節　調査区の基本層序

盛土は 1 区から 6 区で厚さ約 1.5m、7 区から 11 区では厚さ 1m から 1.3m を測った。その盛土除去後、多くの調査区で耕土 20cm、旧耕土 30cm を経て遺構面に達する（図 4）。例外として、1・2・3・4 区では遺構面上に 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土が、7 区では 10YR5/1 褐灰色粘質土が 10cm から 20cm の厚さで堆積する。遺構面は砂礫層およびその上に堆積した 10YR5/3 にぶい黄褐色砂層（7 区）・10YR5/2 灰黄褐色砂層（8 ～ 11 区）が形成している。なお図 4 においてこの砂層は「地山（褐色系砂層）」と表示している。

第 2 節　本発掘調査の成果

今回、遺構面を形成している土層からは遺物は出土していない。なお、8 区では遺構検出の際に砂層上面で摩滅した布目瓦 1 点が出土した。

1・2・3 区では遺構面以下灰白色粘質土が厚く堆積していた。1 区では標高 10.6m で部分的に砂礫層を確認したものの、最深部の標高は不明である。兵庫県教育委員会による調査成果と照合すると、この 3 箇所は南北方向に延びる溝 SD58 に当っていると考えられる（図 6）。今回遺物は出土していないが、兵庫県教育委員会による調査で弥生時代中期から平安時代にかけての遺物が出土しており、弥生時代中期に掘削され、奈良時代から平安時代に完全に埋没したと考えられている（兵庫県教育委員会 2005）。

また 4 区北東隅で落ち込みを確認した。深さは約 10cm で、その性格は不明である。西播磨編年Ⅳ期（長友・田中 2007）の椀形高杯や壺の破片が出土した。

5 区以西では、落ち込みを確認した。5 区の北東隅で砂礫層が確認できたが、それ以外は 10YR5/2 灰黄褐色砂層が堆積していた。砂礫層は西に向かって急激に下がっており、西壁での砂礫層上面の標高は約 10.8m である。また 6 区ではボーリングステッキで標高 10.6m まで確認をおこなったが、砂礫層は確認できていない。埋土は 10YR5/2 灰黄褐色砂層で、色調・土質のわずかな違いから上下に分層したが、基本的には同一の土層として良いものと考えている。現状ではその性格は明確にはできていないが、自然地形の落ち込みの可能性が高いと考えている。また、この落ち込みの埋土は 8 区から 11 区で遺構面を形成する 10YR5/2 灰黄褐色砂層と色調・土質ともにほとんど差がなかった。出土遺物としては、弥生土器壺がある（図 5－1・2）。1 は 6 区の旧耕土と落ち込み埋土の境で出土した（図 4－6 区、写真図版 3－6 区南壁際遺物出土状況）が、土器内部にも灰黄褐色砂層が入り込んでいたため、落ち込みの遺物として報告する。残存高 13.4cm、胴部最大径 17.4cm、底部径 6.0cm を測る。外面下部は縦方向のミガキ調整、中央は横方向のミガキ調整、上半は不明瞭ながらハケ目がみられる。内面はハケ調整である。胎土は 10YR8/2

灰白色を呈する。西播磨編年Ⅳ期にあたる。2 は落ち込み埋土下層で出土した（写真図版 3－6 区南西隅遺物出土状況）。残存高 9.8cm、胴部最大径 12.0cm を測る。外面は不明瞭ながらミガキ調整がみられ、内面は板状工具で掻きあげている。胎土は 10YR7/2 にぶい黄橙色を呈する。西播磨編年Ⅳ期にあたる。その他、6 区では落ち込み埋土中から砥石が 1 点出土した。

以上のように、線路北側の調査区では建物跡の痕跡は全くみられなかったが、線路南側の 7・8・11 区ではピットを確認した。これらは、埋土の色調・土質が遺構面を形成する砂層と非常によく似ていたため、砂層除去後の砂礫層上面で初めて平面検出が可能であった。

ピットは計 12 基を確認した。建物として復元できるものはない。ピットは直径 40cm 前後、砂礫層上面からの深さは 5cm から 30cm であった。全体として遺物は少ないが、7 区 SP04 からは時期の特定可能な遺物が出土している（図 5－3 ～ 5）。3 は、土師器甕で、残存高 5.0cm、口径 15.3cm、頸部径 13.8cm、胴部最大径 14.7cm を測る。外面は不明瞭ながらハケ目がみられ、口縁部から内面にかけてはナデ調整がなされる。胎土は 10YR7/4 にぶい黄橙色を呈する。4・5 は土師器杯で、いずれも手捏ね成形による。4 は器高 3.5cm、口径 13.5cm、底部径 9.1cm を測る。内外面ナデ調整である。特に口縁部は強いヨコナデで仕上げられ、口縁端部は丸く整えられている。胎土は 7.5YR6/4 にぶい橙色を呈する。5 は器高 3.1cm、口径 12.8cm、底部径 6.4cm を測る。調整等の特徴は 4 と同様である。時期に関しては、土師器杯 4・5 から平安時代のものと考えられる。姫路市書写に所在する書写山円教寺薬師堂第二層・第四層から出土した土師器杯の一群（中井・松本 2013）よりは、新相を示すものであろうか。

第Ⅲ章　総括

今回の調査では、弥生時代中期以降の遺物が出土し、ピット・溝・落ち込みを確認した。ただ調査区は新駅の基礎部分という狭小なものであったため、遺構の広がりの面的な把握はできていない。そのため、隣接地において実施された兵庫県教育委員会の調査成果と照合しつつ、報告をおこなった。

【引用・参考文献】
今里幾次 1962「播磨市之郷弥生式遺蹟の研究」『古代文化』14-9　日本古代文化学会（今里幾次 1980『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会に再録）
鎌木義昌 1971「市之郷遺跡発掘調査概報」『姫路市埋蔵文化財調査報告書』姫路市埋蔵文化財調査団
鎌谷木三次 1942「市之郷廃寺」『播磨上代寺院阯の研究』成武堂
中井淳史・松本彩 2013「書写山円教寺境内出土遺物の調査」『播磨六箇寺の研究Ⅰ―書写山円教寺の歴史文化遺産（一）―』（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第 11 号）大手前大学史学研究所
長友朋子・田中元浩 2007「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第 5 号）大手前大学史学研究所
姫路市 2010『姫路市史』第 7 巻下（資料編考古）
姫路市教育委員会 1999「（仮称）姫路駅周辺第 3 地点遺跡（第 2 次調査）」『TSUBOHORI　平成 9 年度（1997）』（姫路市埋蔵文化財調査略報）
姫路市教育委員会 2003「（仮称）姫路駅周辺第 3 地点遺跡（すこやかセンター建設に伴う）」『TSUBOHORI　平成 13 年度（2001）』（姫路市埋蔵文化財調査略報）
姫路市教育委員会 2002「（仮称）姫路駅周辺第 3 地点遺跡　キャスティ 21 住宅建設予定地」『TSUBOHORI　平成 12 年度（2000）』（姫路市埋蔵文化財調査略報）
姫路市役所 1970『姫路市史』第 2 巻
兵庫県教育委員会 2005『市之郷遺跡Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告第 286 冊）
兵庫県教育委員会 2010『市之郷遺跡Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第 372 冊）
兵庫県教育委員会 2011『市之郷遺跡Ⅲ』（兵庫県文化財調査報告第 406 冊）
兵庫県教育委員会 2012『市之郷遺跡Ⅳ』（兵庫県文化財調査報告第 433 冊）
兵庫県教育委員会 2014『市之郷遺跡Ⅴ』（兵庫県文化財調査報告第 454 冊）

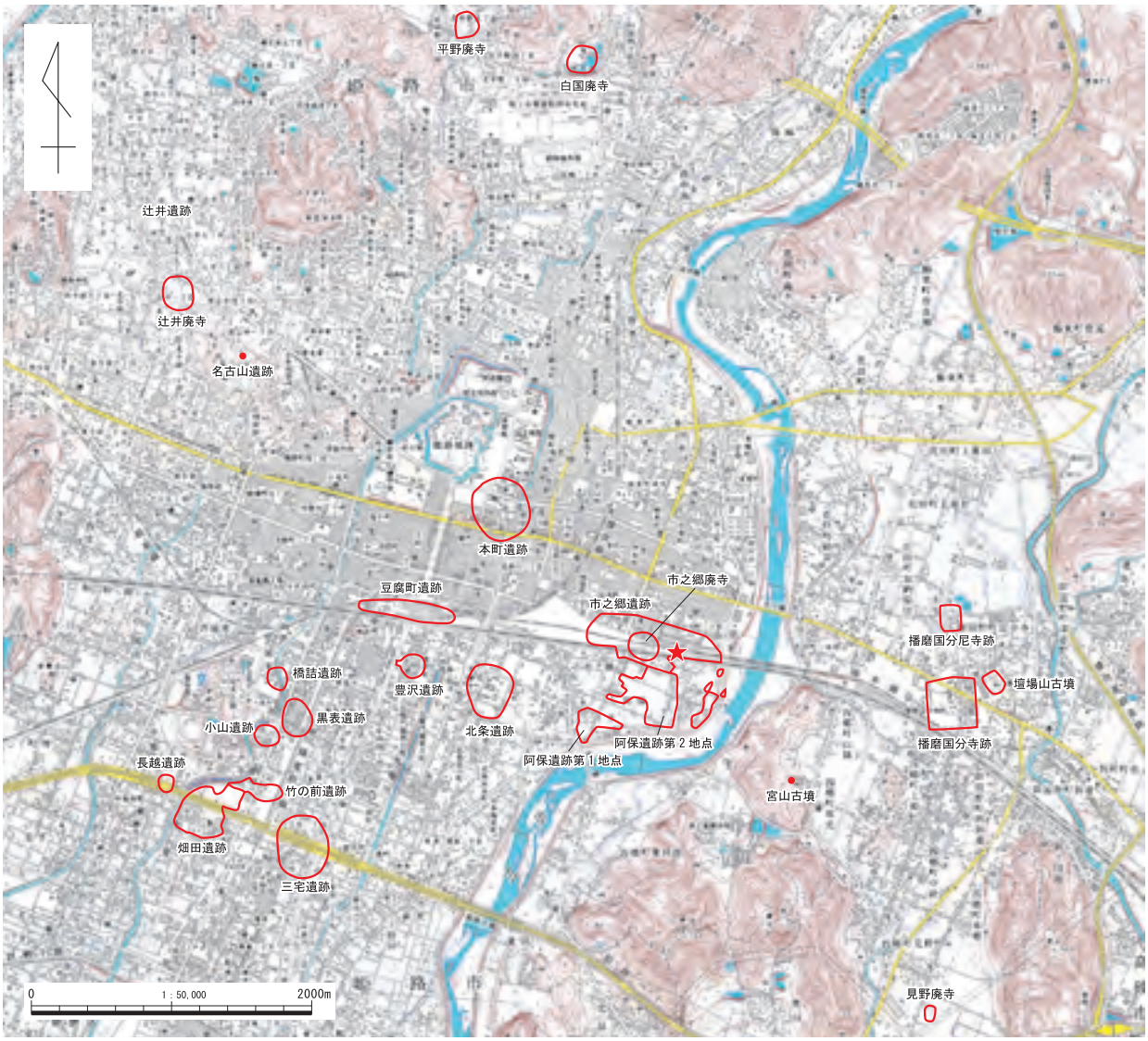


図1　周辺の遺跡（S=1：50,000）

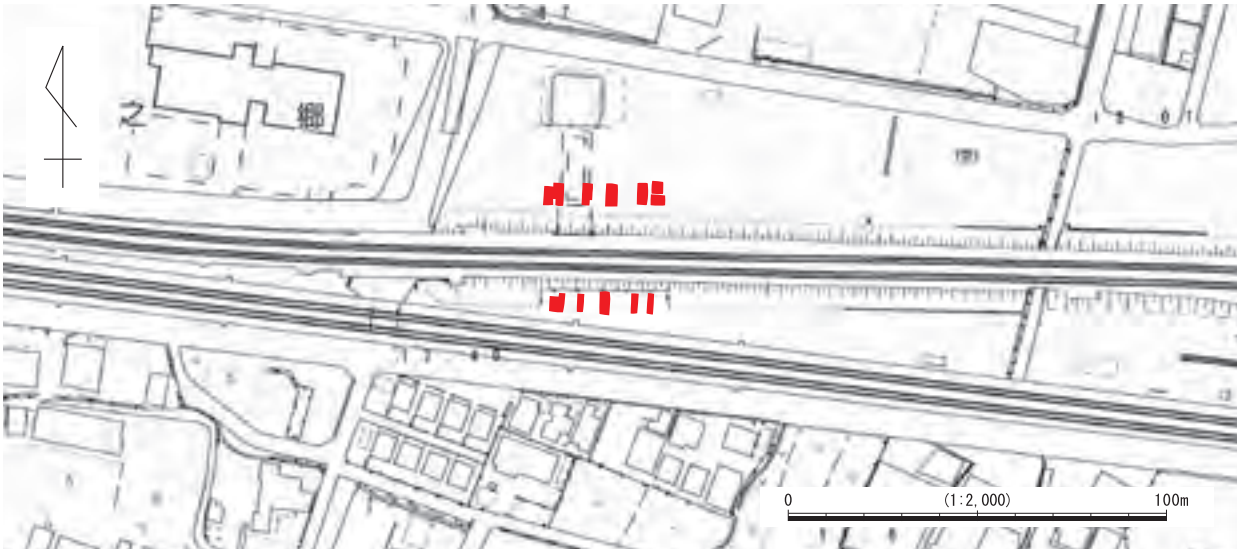


図2　調査地の位置（S=1：2,000）

図版 2

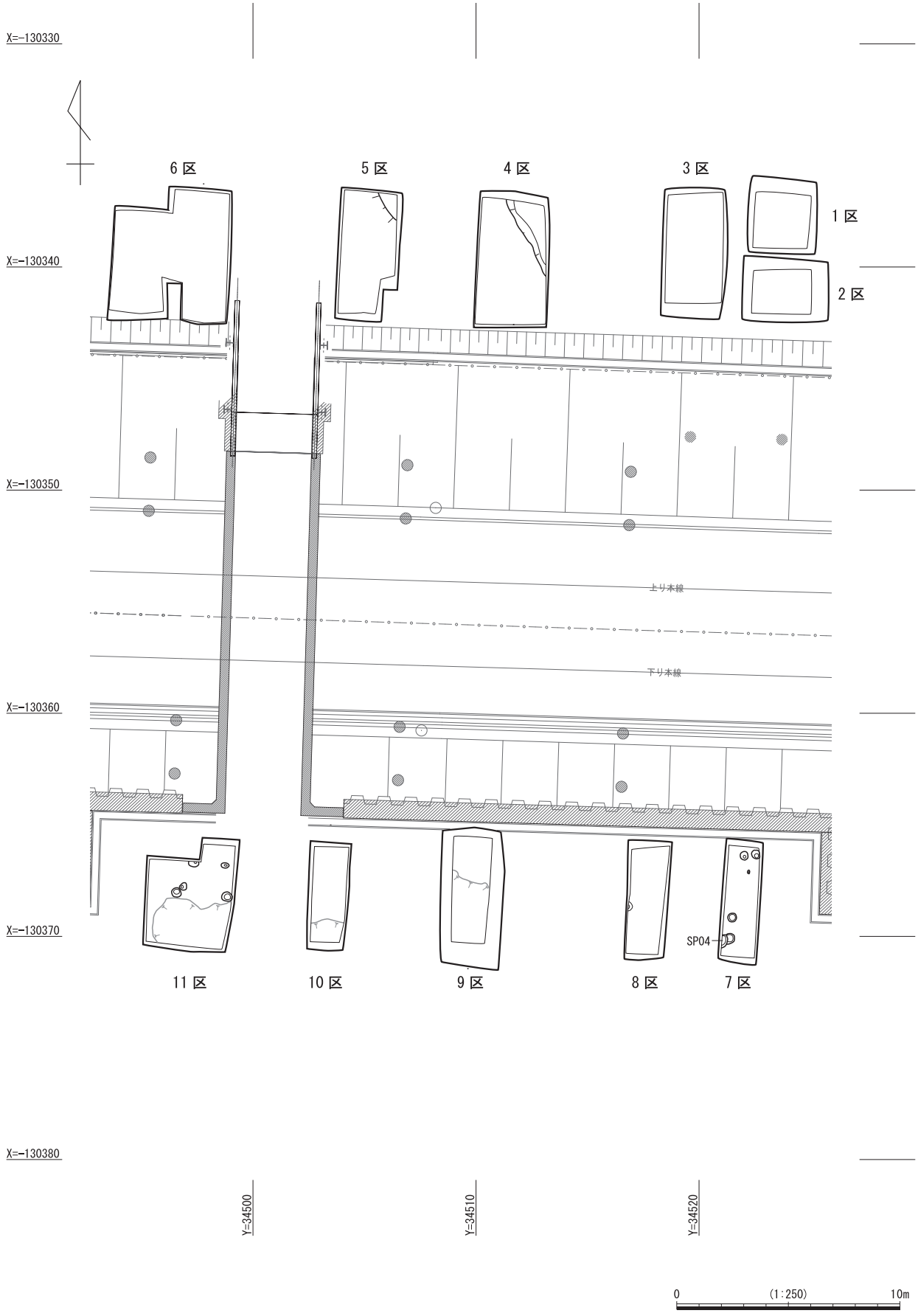


図3　調査区平面図（S=1：250）

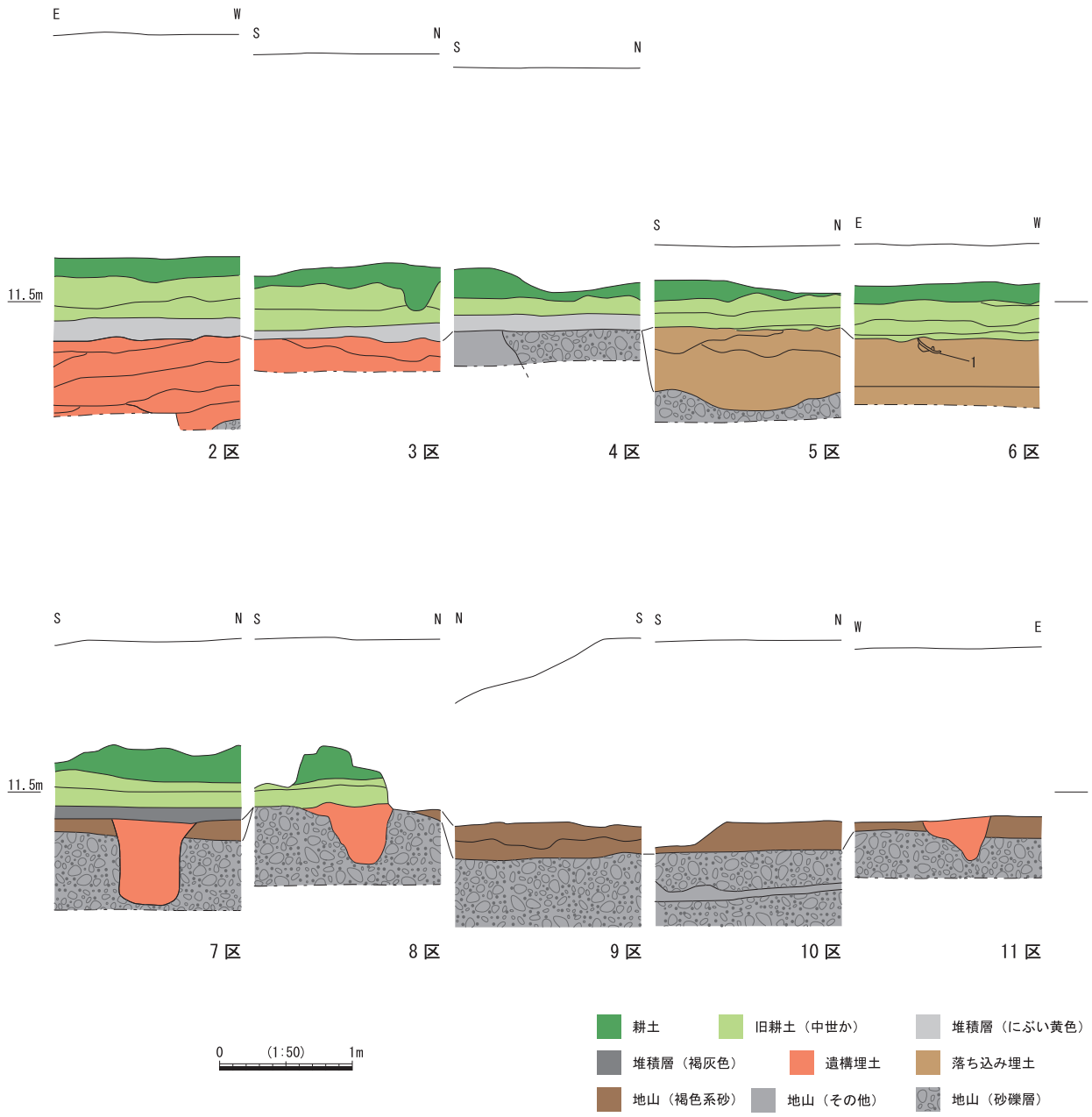


図4　土層断面図（S=1：50）

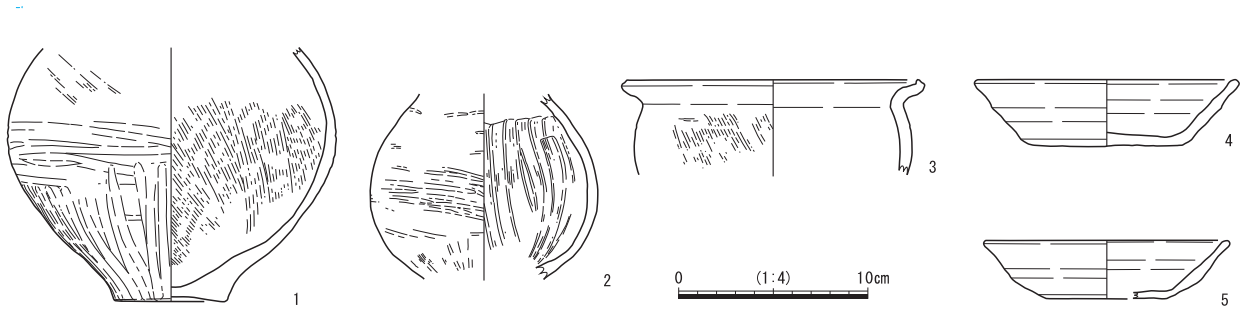


図5　出土遺物実測図（S=1：4）

図版 4

図6　兵庫県第1次調査E区と姫路市第12次調査区

（兵庫県教育委員会 2005 の第 142 図と第 152 図を転載・合成）

6 区西半　全景（西から）

写真図版 2

11 区 全景（西から）

2 区 南壁土層断面（北から）

3 区 西壁土層断面（東から）

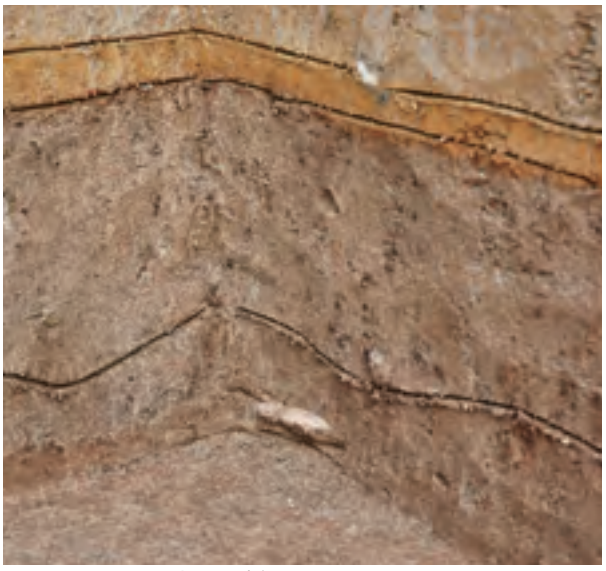
3 区　北壁土層断面（南から）

6 区　南壁土層断面（北から）

4 区　西壁土層断面（東から）

6 区　南壁際遺物出土状況（北から）

5 区　西壁土層断面（東から）



6 区　南西隅遺物出土状況（北東から）

写真図版 4

3 区 全景（南から）

5 区 全景（北から）

4 区 全景（北から）

6 区 西半全景（北から）

7 区　全景（南から）

8 区　全景（南から）

7 区　西壁土層断面（東から）

8 区　西壁土層断面（東から）

報告書抄録

ふりがな	いちのごういせき
書名	市之郷遺跡
副書名	第12次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第34集
編著者名	黒田　祐介
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発行年月日	平成28年(2016年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
いちのごういせき 市之郷遺跡	ひめじしいちのごう 姫路市市之郷 あざながどえ 字長堤他	28201	020462	34° 49′ 27″	134° 42′ 38″	2015.4.7 ～ 2015.6.9	176.2 ㎡	駅舎 建設	2015 0014

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
市之郷遺跡	集落跡	弥生時代 平安時代	溝 落ち込み ピット	弥生土器 須恵器 土師器
要約	JR西日本山陽本線御着・姫路間新駅「東姫路駅」の駅舎建設地において発掘調査をおこなった。その結果、弥生時代に掘削された溝や自然の落ち込み、平安時代のピットを確認した。			

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第34集

市之郷遺跡

―第12次発掘調査報告書―

平成28年（2016年）年3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　姫路市飾東町庄57番地2